



2021年11月12日

各 位

会 社 名	株 式 会 社 青 森 銀 行
代 表 者 名	取 締 役 頭 取 成 田 晋
コ ー ド 番 号	(8342 東証第一部)
問 合 せ 先	執 行 役 員 総 合 企 画 部 長 木 立 晋 (TEL 017-777-1111)
会 社 名	株 式 会 社 み ち の く 銀 行
代 表 者 名	取 締 役 頭 取 藤 澤 貴 之
コ ー ド 番 号	(8350 東証第一部)
問 合 せ 先	執 行 役 員 経 営 企 画 部 長 古 村 晃 一 (TEL 017-774-1111)

## 株式会社青森銀行と株式会社みちのく銀行の共同持株会社設立（株式移転）に関する 最終契約締結について

株式会社青森銀行（取締役頭取 成田 晋 以下、「青森銀行」といいます。）と株式会社みちのく銀行（取締役頭取 藤澤 貴之 以下、「みちのく銀行」といい、青森銀行とみちのく銀行を総称して、以下、「両行」といいます。）は、2021年5月14日に両行間で締結した経営統合の検討に関する基本合意書（以下、「本基本合意書」といいます。）に基づき、本日開催したそれぞれの取締役会において、両行の株主総会の承認並びに銀行法及び地域における一般乗合旅客自動車運送事業及び銀行業に係る基盤的なサービスの提供の維持を図るための私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律の特例に関する法律（以下、「特例法」といいます。）に基づく認可を含む関係当局の認可等が得られることを前提として、株式移転の方式により2022年4月1日（以下、「効力発生日」といいます。）をもって両行の完全親会社となる「株式会社プロクレアホールディングス」（以下、「共同持株会社」といいます。）を設立すること（以下、「本株式移転」といいます。）、並びに共同持株会社の概要及び本株式移転の条件等について決議し、本日、当該決議に基づき、両行間で経営統合契約書（以下、「本経営統合契約書」といいます。）を締結いたしましたので、下記のとおりお知らせいたします。なお、本株式移転に係る株式移転計画書（以下、「本株式移転計画書」といいます。）につきましては、2021年11月中に作成することを予定しております（詳細は、下記2.（1）「本株式移転の日程」をご参照ください。）。

### 記

#### 1. 本株式移転による経営統合の概要

##### （1）経営統合の経緯

青森銀行とみちのく銀行は、共に青森県に本店を置く地方銀行であり、それぞれ企業理念として

地域、お客さまをキーワードとして掲げ、豊かな地域社会の創造とお客さまの幸福・発展を使命に金融仲介機能の発揮に取り組み、安定的な金融システムの維持・提供を通じて地域社会とお客さまに貢献してまいりました。

一方、長きに亘る低金利環境により預貸金利鞘の縮小と有価証券運用収益の減少が継続する中、青森県においては人口減少・少子高齢化の進展が確実視され、地域経済への影響は増大していくことが懸念されており、両行を取り巻く経営環境は益々厳しさが増していくものと予想されます。

また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けた地域の事業者への円滑な金融支援やウィズコロナ・アフターコロナといった社会構造の変革への対応等、地域社会が持続的に発展していくために、両行が果たすべき役割はますます重要になっていくものと認識しております。加えて、デジタル技術の進展や規制緩和等を背景とした従来型の金融サービスの垣根を超えた新たな分野への挑戦を通じて、多様化するお客さまニーズへの対応やサービスの充実を図っていく必要があると認識しております。

両行は、2019年10月28日に「包括的連携の検討開始に関するお知らせ」を発表し、ATM相互無料開放を実施するなど多様な分野での連携を模索してまいりましたが、厳しい経営環境を踏まえると、経営統合により高品質で安定的な金融サービスを地域に提供し続けることができる健全な経営基盤を構築し、それぞれの強みを活かして金融仲介機能・金融サービスを強化すること、及び地域における新たな価値を見出し、活かしていくことが、地域金融機関としての使命を果たすための最適な選択であると判断しました。2021年5月14日付プレスリリース「株式会社青森銀行と株式会社みちのく銀行の経営統合に関する基本合意について」においてお知らせしておりますように、両行は、本基本合意書に基づき、2022年4月1日を目処とする本株式移転による共同持株会社の設立、及び効力発生日の2年後を目処とする共同持株会社のもとでの両行の合併を基本方針として、経営統合に向け協議・検討を進めてまいりましたが、本日、両行が相互信頼及び対等の精神に則り、経営統合を行うことについて最終的な合意に至りました。

両行は、新たに設立する共同持株会社の株式について、株式会社東京証券取引所（以下、「東京証券取引所」といいます。）に新規上場申請を行う予定です。なお、2022年4月1日に東京証券取引所市場第一部への上場を予定しておりますが、2022年4月4日に予定される東京証券取引所の新市場区分への変更の際には、プライム市場への上場変更を目指しております。また、両行は本株式移転により共同持株会社の完全子会社となりますので、本株式移転の効力発生日に先立ち、2022年3月30日にそれぞれ東京証券取引所市場第一部を上場廃止になる予定です。なお、共同持株会社の上場日及び両行の上場廃止日の最終的な決定は、東京証券取引所の規則に従って行われます。

## （2）新グループの目的・経営理念

### ①目的

両行グループのノウハウや情報・ネットワークの融合を通じた金融仲介機能の強化や地域の優位性等を活かした事業領域の拡大によって地域・お客さまと共通価値を創造するとともに、経営の合理化・効率化を通じて健全な経営基盤の構築を図り、もって、金融システムの安定と金融サービスの提供の維持・向上、地域産業の更なる発展と地域住民の生活の向上に繋げることで、地域とともに持続的な成長を果たしてまいります。

### ②経営理念

共同持株会社を中心とする新グループの経営理念として以下のとおり定めております。

#### <経営理念>

- 地域の未来を創る
- お客さまと歩み続ける
- 一人ひとりの想いを実現する

#### <経営理念に込めた想い>

- 私たちは、健全性を堅持するとともに、地域の課題や可能性に積極的に挑戦することで、明るく豊かな未来を創ります。
- 私たちは、専門性を高めるとともに、期待を超えるサービスを追求することで、お客さまの信頼に応え、成長と発展に向けてともに歩み続けます。
- 私たちは、自主性を尊重するとともに、多様な個性を力に変えることで、自信と誇りに満ちたやりがいのある組織を築き、一人ひとりの溢れる想いを実現します。

### (3) 経営統合により見込まれる相乗効果

経営統合の目的を早期に達成するため、以下の相乗効果の実現に向けた具体的施策を進めてまいります。

#### ①金融仲介機能・金融サービスの強化

両行が有するノウハウや情報・ネットワークの融合、グループ会社の活用を通じて、お客さまのニーズ・課題をとともに考え解決する伴走型のコンサルティングを展開するほか、ライフステージに応じた高度かつ専門性の高いソリューションを提供いたします。

#### ②事業領域の拡大

両行が保有する人材・情報・ノウハウと地域資源を結集し、地域商社機能の拡充に取り組むなど、地域の優位性やポテンシャルを活かし、地域の課題を解決する新規事業領域へ挑戦いたします。

#### ③経営の合理化・効率化

システム・事務の共通化、本部組織のスリム化、チャネル網や子会社の最適化等、経営の合理化・効率化を進めることで、将来にわたって金融サービスを提供し、地域社会に貢献し続けることができる健全な経営基盤を構築し、創出した経営資源を成長分野へ投入・再配置します。

なお、両行合併後の勘定系システムは、青森銀行が利用している「地銀共同センター」（ベンダー：株式会社エヌ・ティ・ティ・データ）とし、安定的なシステム移行と相乗効果の極大化に向けたシステム構築を進めてまいります。

※本プレスリリースと併せて、別添「経営統合に関する最終合意について」をご参照ください。

## 2. 本株式移転の要旨

### (1) 本株式移転の日程

2021年11月12日（金）（本日）	本経営統合契約書の締結に係る取締役会決議及び本経営統合契約書の締結（両行）
2021年11月12日（金）（本日）	臨時株主総会に係る基準日の公告日（青森銀行） 臨時株主総会並びに普通株主による種類株主総会及びA種

	優先株主による種類株主総会に係る基準日の公告日（みちのく銀行）
2021年11月29日（月）	臨時株主総会に係る基準日（青森銀行）
	臨時株主総会並びに普通株主による種類株主総会及びA種優先株主による種類株主総会の基準日（みちのく銀行）
2021年11月中（予定）	本株式移転計画書の作成に係る取締役会決議及び本株式移転計画書の作成（両行）（注1）
2022年1月26日（水）（予定）	株式移転計画承認に係る臨時株主総会（青森銀行）
	株式移転計画承認に係る臨時株主総会並びに普通株主による種類株主総会及びA種優先株主による種類株主総会（みちのく銀行）
2022年3月30日（水）（予定）	東京証券取引所上場廃止日（両行）
2022年4月1日（金）（予定）	共同持株会社設立登記日（効力発生日）及び同社株式上場日

（注1）本株式移転計画書については、共同持株会社の設立時取締役の検討のため、2021年11月中に作成する予定です。これに伴い、共同持株会社の設立時代表取締役以外の設立時取締役の氏名は、本株式移転計画書の作成時に決定することを予定しておりますが、本株式移転に係る諸条件につき、本プレスリリースに記載の内容から変更の予定はございません。なお、共同持株会社の設立時の代表取締役その他の設立時取締役については、下記5.（6）「代表者及び役員 の就任予定」をご参照ください。

（注2）今後手続を進める中で、本株式移転の手続進行上の必要性その他の事由により必要な場合には、両行で協議のうえ、日程を変更する場合があります。

## （2）本株式移転の方式

両行を株式移転完全子会社、新規に設立する共同持株会社を株式移転完全親会社とする共同株式移転となります。

## （3）本株式移転に係る割当ての内容（株式移転比率）

会社名	青森銀行	みちのく銀行
株式移転比率 （普通株式）	1	0.46
株式移転比率 （A種優先株式）	—	0.46

## （注1）株式の割当比率

青森銀行の普通株式1株に対して、共同持株会社の普通株式1株を、みちのく銀行の普通株式1株に対して、共同持株会社の普通株式0.46株を割当交付いたします。また、みちのく銀行のA種優先株式1株に対して、共同持株会社の第一種優先株式0.46株を割当交付致します。なお、共同持株会社の単元株式数は100株とする予定です。

本株式移転により、両行の株主に交付しなければならない共同持株会社の普通株式の数に1株に満たない端数が生じた場合には、会社法第234条その他関連法令の規定に従い、当該株主に対し1株に満たない端数部分に応じた金額をお支払いいたします。

なお、上記株式移転比率は、本経営統合契約書の締結後、本株式移転の効力発生日までの間において、青森銀行若しくはみちのく銀行の財産状態若しくは経営状態に重大な悪影響を与える事由が発生し、又はかかる事由が存在することが判明した場合等には、両行で協議のうえ、変更することがあります。

(注2) 共同持株会社が交付する新株式数 (予定)

普通株式：28,659,974株

上記は、青森銀行の2021年9月30日時点における普通株式の発行済株式総数(20,512,161株)及びみちのく銀行の2021年9月30日時点における普通株式の発行済株式総数(18,135,395株)を前提として算出しております。但し、共同持株会社が両行の発行済株式の全部を取得する時点の直前時(以下、「基準時」といいます。)までに、それぞれが保有する自己株式(但し、青森銀行の役員報酬BIP信託及びみちのく銀行の株式給付信託の信託財産としてそれぞれの信託口が保有する自己株式を除きます。以下同じです。)の全部を消却する予定であるため、青森銀行の2021年9月30日時点における自己株式数(129,472株)及びみちのく銀行の2021年9月30日時点における自己株式数(141,297株)は、上記の算出において、新株式交付の対象から除外しております。なお、青森銀行又はみちのく銀行の株主から株式買取請求権の行使がなされた場合等、両行の2021年9月30日時点における自己株式数が基準時までに変動した場合は、共同持株会社が交付する新株式数が増減することがあります。

第一種優先株式：1,840,000株

上記は、みちのく銀行の2021年9月30日時点におけるA種優先株式の発行済株式総数(4,000,000株)を前提として算出しております。

(注3) 単元未満株式の取扱い

本株式移転により、1単元(100株)未満の共同持株会社の普通株式(以下、「単元未満株式」といいます。)の割当てを受ける両行の株主の皆様につきましては、その保有する単元未満株式を東京証券取引所その他の金融商品取引所において売却することはできません。そのような単元未満株式を保有することとなる株主の皆様は、会社法第192条第1項の規定に基づき、共同持株会社に対し、自己の保有する単元未満株式を買い取ることを請求することが可能です。また、会社法第194条第1項及び共同持株会社の定款に定める規定に基づき、共同持株会社に対し、自己の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求することも可能です。

(4) 本株式移転に伴う新株予約権及び新株予約権付社債に関する取扱い

両行は、新株予約権及び新株予約権付社債を発行しておりません。

### 3. 本株式移転に係る割当ての内容の算定根拠等

#### (1) 割当ての内容の根拠及び理由

上記1.「本株式移転による経営統合の概要」に記載のとおり、両行は、2021年5月14日に両行の間で合意した経営統合の検討に関する本基本合意書に基づき、2022年4月1日を目処に共同株式移転の方式により共同持株会社を設立し経営統合を行うことに向け、統合準備委員会を設置して協議・検討を進めてまいりました。

青森銀行は、下記(4)「公正性を担保するための措置」に記載のとおり、本株式移転の対価の公正性その他の本株式移転の公正性を担保するため、青森銀行の第三者算定機関として大和証券株式会社(以下、「大和証券」といいます。)を、リーガル・アドバイザーとして長島・大野・常松法律事務所をそれぞれ選定のうえ、本株式移転に関する検討を開始し、第三者算定機関である大和証券から2021年11月11日付で受領した株式移転比率算定書及びリーガル・アドバイザーである長島・大野・常松法律事務所からの法的助言を参考に、青森銀行がみちのく銀行に対して実施したデュー・ディリジェンスの結果等を踏まえ、慎重に協議・検討した結果、上記2.(3)「本株式移転に係る割当ての内容(株式移転比率)」記載の株式移転比率により本株式移転を行うことが妥当であると判断しました。

他方、みちのく銀行は、下記(4)「公正性を担保するための措置」に記載のとおり、本株式移転の対価の公正性その他の本株式移転の公正性を担保するため、みちのく銀行の第三者算定機関としてみずほ証券株式会社(以下、「みずほ証券」といいます。)を、リーガル・アドバイザーとして森・濱田松本法律事務所をそれぞれ選定のうえ、本株式移転に関する検討を開始し、第三者算定機関であるみずほ証券から2021年11月11日付で受領した株式移転比率算定書及びリーガル・アドバイザーである森・濱田松本法律事務所からの法的助言を参考に、みちのく銀行が青森銀行に対して実施したデュー・ディリジェンスの結果等を踏まえ、慎重に協議・検討した結果、上記2.(3)「本株式移転に係る割当ての内容(株式移転比率)」記載の株式移転比率により本株式移転を行うことが妥当であると判断しました。なお、両行は、みちのく銀行が発行しているA種優先株式については、同行の普通株式のような市場価格が存在しないため、普通株式に係る株式移転比率を考慮し、A種優先株式1株につき共同持株会社の第一種優先株式0.46株を割当交付することとしたうえで、共同持株会社にて新たに発行して割当交付する第一種優先株式の内容について、A種優先株式の発行要項の定めに従い、A種優先株式1株の経済的価値と、共同持株会社にて新たに発行する第一種優先株式0.46株の経済的価値とが実質的に同等となるように定めております。

このように、これらの第三者算定機関による算定・分析結果及びリーガル・アドバイザーの助言を参考に、両行それぞれが相手方に対して実施したデュー・ディリジェンスの結果等を踏まえて、両行の財務の状況、資産の状況、将来の見通し等の要因を総合的に勘案し、両行間で株式移転比率について慎重に交渉・協議を重ねた結果、両行は、最終的に上記2.(3)「本株式移転に係る割当ての内容(株式移転比率)」記載の株式移転比率が妥当であるという判断に至り、本日開催された両行の取締役会において本株式移転における株式移転比率を決定し、合意いたしました。

#### (2) 算定に関する事項

##### ①算定機関の名称及び両行との関係

青森銀行のフィナンシャル・アドバイザー(第三者算定機関)である大和証券は、青森銀行及びみちのく銀行の関連当事者には該当せず、本株式移転に関して記載すべき重要な利害関係を有して

おりません。また、みちのく銀行のフィナンシャル・アドバイザー（第三者算定機関）であるみずほ証券は、青森銀行及びみちのく銀行からは独立した算定機関であり、青森銀行及びみちのく銀行の関連当事者には該当せず、みずほ証券のグループ企業である株式会社みずほ銀行（以下、「みずほ銀行」といいます。）は、青森銀行及びみちのく銀行の株主たる地位を有しておりますが、本株式移転に関して青森銀行及びみちのく銀行との利益相反に係る重要な利害関係を有しておりません。みちのく銀行が確認したところ、みずほ証券によれば、みずほ証券は金融商品取引法（昭和23年法律第25号。その後の改正を含みます。）第36条第2項及び金融商品取引業等に関する内閣府令第70条の4の適用法令に従い、みずほ証券とみずほ銀行間の情報隔壁措置等の適切な利益相反管理体制を構築し、かつ実施しており、みずほ銀行の株主の地位とは独立した立場で本株式移転に用いられる株式移転比率の算定を行っているとのことです。みちのく銀行は、みずほ証券とみずほ銀行との間において適切な弊害防止措置が講じられていること、みちのく銀行とみずほ証券は一般取引先と同様の取引条件での取引を実施しているため第三者算定機関としての独立性が確保されていること、みずほ証券は過去の同種事案の第三者算定機関としての実績を有していること等を踏まえ、みずほ証券を青森銀行及びみちのく銀行から独立した第三者算定機関として選定したとのことです。

## ②算定の概要

本株式移転に用いられる株式移転比率の算定にあたって公正性を期すため、青森銀行は大和証券を第三者算定機関として起用し、また、みちのく銀行はみずほ証券を第三者算定機関として起用し、それぞれ株式移転比率の算定・分析を依頼しました。

大和証券は、両行の株式移転比率について、両行が東京証券取引所市場第一部に上場しており、市場株価が存在することから市場株価法による算定を行うとともに、将来の事業活動の状況を評価に反映するため、一定の資本構成を維持するために必要な内部留保等を考慮した後の株主に帰属する利益を資本コストで現在価値に割り引くことで株式価値を分析する手法で、金融機関の評価に広く利用される配当割引モデル法（以下、「DDM法」といいます。）による算定を行いました。各手法における算定結果は以下のとおりです。なお、下記の株式移転比率の算定レンジは、青森銀行の普通株式1株に対して共同持株会社の普通株式を1株割り当てる場合に、みちのく銀行の普通株式1株に対して割り当てる共同持株会社の普通株式数の算定レンジを記載したものです。

	採用手法	株式移転比率の算定レンジ
1	市場株価法	0.42～0.45
2	DDM法	0.45～0.59

なお、市場株価法では、株式移転比率算定書作成日である2021年11月11日（以下、「基準日」といいます。）を基準として、基準日の株価終値及び基準日までの1週間、1ヶ月間、3ヶ月間及び6ヶ月間の各株価終値平均に基づき算定いたしました。

大和証券は、株式移転比率の算定に際して、両行から提供を受けた資料及び情報、一般に公開された情報等を原則としてそのまま使用し、分析及び検討の対象とした全ての資料及び情報等が全て正確かつ完全なものであることを前提としており、これらの資料及び情報の正確性又は完全性に関し独自に検証を行っておらず、またその義務を負うものではありません。また、大和証券は、両行及びそ

これらの関係会社（財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則第8条第8項に定義される「関係会社」をいいます。以下、同じとします。）の全ての資産又は負債（金融派生商品、簿外資産及び負債、その他の偶発債務を含みますが、これらに限られません。）について、個別の資産及び負債の分析及び評価を含め、独自に評価、鑑定又は査定を行っておらず、また第三者機関への評価、鑑定又は査定の依頼も行っておりません。大和証券は、提供された両行それぞれの事業計画、財務予測その他将来に関する情報が、両行それぞれの経営陣による現時点において可能な最善の予測と判断に基づき、合理的かつ適正な手続に従って作成されていることを前提としており、青森銀行の同意を得て、青森銀行及びみちのく銀行の事業計画、財務予測その他将来に関する情報の正確性、妥当性及び実現可能性について独自に検証することなくこれらの情報に依拠しております。算定の基礎となる両行の将来の財務予測には、大幅な増減益を見込んでいる事業年度はありません。大和証券の算定は、2021年11月11日現在における金融、経済、市場その他の状況を前提としております。

みずほ証券は、両行の株式移転比率について、両行が東京証券取引所市場第一部に上場しており、市場株価が存在することから市場株価基準法による算定を行うとともに、両行とも比較可能な上場類似企業が複数存在し、類似企業比較による株式価値の類推が可能であることから類似企業比較法による算定を行い、さらに、将来の事業活動の状況を評価に反映するため、一定の資本構成を維持するために必要な内部留保等を考慮した後の株主に帰属するキャッシュフローを資本コストで現在価値に割り引くことで株式価値を分析する手法で、金融機関の評価に広く利用されるDDM法による算定を行いました。各手法における算定結果は以下のとおりです。下記の株式移転比率の算定レンジは、青森銀行の普通株式1株に対して共同持株会社の普通株式を1株割り当てる場合に、みちのく銀行の普通株式1株に対して割り当てる共同持株会社の普通株式数の算定レンジを記載したものです。

	採用手法	株式移転比率の算定レンジ
1	市場株価基準法	0.42～0.45
2	類似企業比較法	0.44～1.02
3	DDM法	0.34～0.97

なお、市場株価基準法では、株式移転比率算定書作成日である2021年11月11日（基準日）を基準として、基準日の株価終値及び基準日までの1ヶ月間、3ヶ月間、6ヶ月間の各株価終値平均に基づき算定いたしました。

みずほ証券は、株式移転比率の算定に際して、両行から提供を受けた情報及び公開情報を使用し、それらの資料、情報等が全て正確かつ完全なものであることを前提としており、独自にそれらの正確性及び完全性の検証を行っておりません。また、両行及びこれらの関係会社の資産又は負債（偶発債務を含みます。）について、個別の資産及び負債の分析及び評価を含め、独自に評価、鑑定又は査定を行っておらず、第三者機関への依頼も行っておりません。みずほ証券の株式移転比率の算定は、2021年11月11日までの情報及び経済条件を反映したものであり、また、両行の財務予測（利益計画その他の情報を含みます。）については、両行の経営陣により、現時点で得られる最善の予測及び判断に基づき合理的に作成されたものであることを前提としております。なお、みずほ証券がDDM法において使用した算定の基礎となる両行の将来の利益計画においては、大幅な増減益を見込んでおりません。



### (3) 共同持株会社の上場申請等に関する取扱い

両行は、新たに設立する共同持株会社の株式について、東京証券取引所に新規上場申請を行う予定です。なお、2022年4月1日に東京証券取引所市場第一部への上場を予定しておりますが、2022年4月4日に予定される東京証券取引所の新市場区分への変更の際には、プライム市場への市場変更を目指しております。

また、両行は、本株式移転により共同持株会社の子会社となりますので、共同持株会社の上場に先立ち、2022年3月30日にそれぞれ東京証券取引所を上場廃止となる予定です。

なお、共同持株会社の株式上場日及び両行の上場廃止日につきましては、東京証券取引所の各規則により決定されます。

### (4) 公正性を担保するための措置

青森銀行は、本株式移転の公正性を担保するために、以下の措置を講じております。

#### ①独立した第三者算定機関からの株式移転比率算定書等の取得

青森銀行は、本株式移転の公正性を担保するために、上記3.(1)「割当ての内容の根拠及び理由」に記載のとおり、第三者算定機関として大和証券を起用し、本株式移転に用いる株式移転比率の合意の基礎とすべく株式移転比率算定書を取得しております。青森銀行は、第三者算定機関である大和証券の分析及び意見を参考としてみちのく銀行と交渉・協議を行い、上記2.(3)「本株式移転に係る割当ての内容(株式移転比率)」記載の株式移転比率により本株式移転を行うことを本日開催された取締役会において決議いたしました。

また、青森銀行は大和証券から2021年11月11日付にて、本株式移転における株式移転比率は、青森銀行にとって財務的見地から妥当である旨の意見書(フェアネス・オピニオン)を取得しております。大和証券のフェアネス・オピニオンに関する重要な前提条件等については別紙1をご参照ください。

#### ②独立した法律事務所からの助言

青森銀行は、取締役会の意思決定の公正性及び適正性を担保するために、両行から独立したリーガル・アドバイザーである長島・大野・常松法律事務所から、青森銀行の意思決定の方法、過程その他本株式移転に係る手続に関する法的助言を受けております。

他方、みちのく銀行は、本株式移転の公正性を担保するために、以下の措置を講じております。

#### ①独立した第三者算定機関からの株式移転比率算定書等の取得

みちのく銀行は、本株式移転の公正性を担保するために、上記3.(1)「割当ての内容の根拠及び理由」に記載のとおり、第三者算定機関としてみずほ証券を起用し、みずほ証券は、本株式移転における株式移転比率に関する交渉及び協議に用いるために、その財務的分析及び算定を行いました。みちのく銀行は、第三者算定機関であるみずほ証券の分析及び助言を参考として青森銀行と交渉・協議を行い、上記2.(3)「本株式移転に係る割当ての内容(株式移転比率)」記載の株式移転比率により本株式移転を行うことを本日開催された取締役会において決議いたしました。

また、みちのく銀行はみずほ証券から2021年11月11日付にて、本株式移転における株式移転比率

は、みちのく銀行の株主にとって財務的見地から妥当である旨の意見書（フェアネス・オピニオン）を取得しております。みずほ証券の株式移転比率の分析及び意見書に関する前提条件及び免責事項については別紙2をご参照ください。

②独立した法律事務所からの助言

みちのく銀行は、取締役会の意思決定の公正性及び適正性を担保するために、両行から独立したリーガル・アドバイザーである森・濱田松本法律事務所から、みちのく銀行の意思決定の方法、過程その他本株式移転に係る手続に関する法的助言を受けております。

(5) 利益相反を回避するための措置

本株式移転にあたって、青森銀行とみちのく銀行との間には特段の利益相反関係は存しないことから、特別な措置は講じておりません。

#### 4. 本株式移転の当事会社の概要

##### (1) 会社概要 (2021年9月末時点)

名 称	株式会社青森銀行		株式会社みちのく銀行	
所 在 地	青森県青森市橋本一丁目9番30号		青森県青森市勝田一丁目3番1号	
代 表 者	取締役頭取 成田 晋		取締役頭取 藤澤 貴之	
事 業 内 容	銀行業		銀行業	
資 本 金	195億円		369億円	
設 立 年 月 日	1943年10月1日		1921年10月27日	
発 行 済 株 式 数	普通株式 20,512,161株		普通株式 18,135,395株 A種優先株式 4,000,000株	
決 算 期	3月31日		3月31日	
従 業 員 数	1,230人		1,299人	
店舗数(出張所含む)	88か店		94か店	
大株主及び持株比率 (2021年9月末時点) (自己株式を除く)	日本マスタートラスト信託銀行 株式会社(信託口)	8.40%	株式会社整理回収機構	18.18%
	株式会社日本カストディ銀行 (信託口4)	4.27%	日本マスタートラスト信託銀行株 式会社(信託口)	6.94%
	株式会社日本カストディ銀行 (信託口)	4.03%	株式会社日本カストディ銀行 (信託口4)	5.61%
	日本生命保険相互会社	2.34%	株式会社日本カストディ銀行 (信託口)	4.35%
	明治安田生命保険相互会社	2.33%	みちのく銀行行員持株会	1.93%
当 事 会 社 間 の 関 係				
資 本 関 係	青森銀行はみちのく銀行の普通株式 600 株を保有しております。また、みちのく銀行の子会社であるみちのくリース株式会社は、青森銀行の普通株式 400 株を保有しております。			
人 的 関 係	該当事項はありません。			
取 引 関 係	通常発生する銀行間取引に加えて、ATM利用手数料相互無料開放によるお客さまの利便性の向上及びメール便の共同運行など業務の効率化に係る連携を行うとともに、更なるお客さまサービスの向上・地域貢献及び経営の生産性向上に向けた包括的な連携の検討を進めております。			
関 連 当 事 者 へ の 該 当 状 況	該当事項はありません。			

## (2) 最近3年間の経営成績及び財政状態

(単位：百万円)

決算期	株式会社青森銀行			株式会社みちのく銀行		
	2019年 3月期	2020年 3月期	2021年 3月期	2019年 3月期	2020年 3月期	2021年 3月期
連結純資産	120,125	109,088	118,932	89,171	81,606	88,717
連結総資産	3,043,392	3,185,755	3,681,441	2,115,746	2,169,533	2,360,494
1株当たり連結 純資産(円)	5,927.63	5,376.71	5,861.28	3,896.49	3,459.62	3,853.72
連結経常収益	42,984	43,003	41,350	42,111	37,646	41,877
連結経常利益	4,959	2,324	3,665	1,523	△3,209	2,217
親会社株主に帰属す る当期純利益	3,218	1,470	2,251	670	△4,596	1,942
1株当たり連結当期 純利益(円)	158.53	72.48	110.98	25.79	△273.36	97.67
1株当たり配当金 (円)	普通株式 60.00	普通株式 55.00	普通株式 50.00	普通株式 40.00 A種優先 株式 54.30	普通株式 20.00 A種優先 株式 54.30	普通株式 20.00 A種優先 株式 54.80

5. 本株式移転により新たに設立する会社（共同持株会社）の概要

(1) 商号	株式会社プロクレアホールディングス (英文表示: Procrea Holdings, Inc.)
(2) 事業内容	銀行持株会社として、次の業務を営むことを目的とする。 (1) 銀行および銀行法により子会社とすることができる会社の経営管理 (2) 前号に掲げる業務に付帯関連する一切の業務 (3) 前2号に掲げる業務のほか、銀行法により銀行持株会社が営むことができる業務
(3) 本店所在地	青森県青森市勝田一丁目3番1号
(4) 主な本社機能所在地	青森県青森市橋本一丁目9番30号
(5) 機関設計	監査等委員会設置会社
(6) 代表者及び役員の就任予定	共同持株会社の設立時取締役については、①設立時取締役（設立時監査等委員を除きます。）の員数を合計10名とし、このうち、青森銀行が6名（うち社外取締役1名）を、みちのく銀行が4名（うち社外取締役1名）を、それぞれ指名すること、及び、②設立時監査等委員である設立時取締役の員数を合計4名とし、このうち、青森銀行が3名（うち社外取締役2名）を、みちのく銀行が1名（うち社外取締役1名）を、それぞれ指名することが合意されております。 また、上記①の合意に基づき各行が指名する設立時取締役のうちの1名として、青森銀行は、その取締役頭取である成田晋を、みちのく銀行は、その取締役頭取である藤澤貴之を、それぞれ指名することとし、代表取締役社長には青森銀行の成田晋取締役頭取が、代表取締役副社長にはみちのく銀行の藤澤貴之取締役頭取が、それぞれ就任することが合意されております。その他設立時取締役の氏名につきましては、上記に基づき、本株式移転計画書の作成時に決定する予定です。
(7) 資本金	200億円
(8) 決算期	3月31日
(9) 純資産（連結）	未定
(10) 総資産（連結）	未定
(11) 上場証券取引所	東京証券取引所
(12) 会計監査人	EY新日本有限責任監査法人
(13) 株主名簿管理人	三菱UFJ信託銀行株式会社

#### 6. 本株式移転に伴う会計処理の概要

本株式移転に伴う会計処理は、企業結合に関する会計基準における取得に該当し、パーチェス法が適用される見込みです。また、本株式移転により発生するのれん（又は負ののれん）の金額に関しては、現段階では未定です。

#### 7. 今後の見通し

共同持株会社の業績見通し等につきましては、現在策定中であり、確定次第お知らせいたします。

#### 8. その他

本株式移転は、青森銀行の臨時株主総会において本株式移転計画書及び本株式移転に必要な事項の承認が得られていること、みちのく銀行の臨時株主総会、普通株主による種類株主総会及びA種優先株主による種類株主総会において本株式移転計画書及び本株式移転に必要な事項の承認が得られていること、本株式移転を行うにあたり、必要となる関係当局の認可等（銀行法及び特例法に基づく認可を含む）が得られていること、並びに本株式移転計画書の規定に基づき本株式移転が中止されていないことを前提としています。

以 上

(参考) 青森銀行の当期連結業績予想 (2021年10月7日公表分) 及び前期連結実績

(単位: 百万円)

青森銀行	経常利益	親会社株主に帰属する 当期純利益	1株当たり当期純利益 (円)
当期業績予想 (2022年3月期)	4,900	3,400	167.56
前期実績 (2021年3月期)	3,665	2,251	110.98

(参考) みちのく銀行の当期連結業績予想 (2021年10月21日公表分) 及び前期連結実績

(単位: 百万円)

みちのく銀行	経常利益	親会社株主に帰属する 当期純利益	1株当たり当期純利益 (円)
当期業績予想 (2022年3月期)	2,900	2,500	129.08
前期実績 (2021年3月期)	2,217	1,942	97.67

**【本件に関するお問い合わせ先】**

株式会社青森銀行      総合企画部 広報室      T E L : 017-777-1111

株式会社みちのく銀行    経営企画部 広報室      T E L : 017-774-1274

## 別紙1：大和証券によるフェアネス・オピニオンに関する前提条件等

大和証券は、青森銀行及びみちのく銀行で合意された株式移転比率（以下、「本株式移転比率」といいます。）が青森銀行の普通株主にとって財務的見地から公正である旨の意見書（以下、「本フェアネス・オピニオン」といいます。）を提出するに際して、本株式移転比率の分析及び検討を行っておりますが、当該分析及び検討においては、青森銀行及びみちのく銀行から提供を受けた資料及び情報並びに一般に公開された情報を原則としてそのまま使用し、分析及び検討の対象とした全ての資料及び情報が正確かつ完全であることを前提としており、これらの資料及び情報の正確性又は完全性に関し独自の検証を行っておらず、またその義務を負うものではありません。大和証券は青森銀行の経営陣が、各行から大和証券に提供され、又は大和証券が青森銀行と協議した財務その他の情報について、不完全若しくは誤解を招くようなものとするような事実を一切認識していないことを前提としています。大和証券は、青森銀行及びみちのく銀行並びにそれらの関係会社の全ての資産又は負債（金融派生商品、簿外資産及び負債、その他の偶発債務を含みますが、これらに限られません。）について、個別の資産及び負債の分析及び評価を含め、独自に評価、鑑定又は査定を行っておらず、また第三者機関への評価、鑑定又は査定の依頼も行っておりません。本フェアネス・オピニオンに記載された意見に影響を与える可能性のある青森銀行及びみちのく銀行並びにこれらの関係会社の事実（偶発債務及び訴訟等を含みます。）については、現在及び将来にわたり大和証券に対して未開示の事実が無いことを前提としています。大和証券は、破産、支払不能又はこれらに類似する事項に関するいかなる適用法令の下における青森銀行及びみちのく銀行並びにそれらの関係会社の支払能力又は信用力についても評価を行っておりません。大和証券は、青森銀行及びみちのく銀行並びにそれらの関係会社のいかなる財産又は設備についてもその実地の見分を行っておらず、またその義務を負うものではありません。青森銀行の法務、会計及び税務の各アドバイザーは、青森銀行と予め合意した事項及び範囲においてみちのく銀行に対する各デュー・ディリジェンスを実施しており、大和証券は、かかるデュー・ディリジェンスの対象事項及び範囲について独自に検証を行っておらず、またその義務を負うものではありません。

大和証券は、本フェアネス・オピニオンに記載の意見を述べるにあたり、大和証券に提供された青森銀行及びみちのく銀行の事業計画、財務予測その他将来に関する情報が、青森銀行及びみちのく銀行それぞれの経営陣による現時点において可能な最善の予測と判断に基づき、合理的にかつ適正な手続に従って作成されていることを前提としており、青森銀行の同意を得て、独自に検証することなくこれらの情報に依拠しています。大和証券は、みちのく銀行におけるA種優先株式の返済計画を含む当該事業計画及び財務予測作成にかかる各種前提条件が正確かつ実現可能であることを前提としており、これらの正確性及び実現可能性について、独自の検証を行っておらず、またその義務を負うものではありません。

大和証券は、大和証券が検討した本株式移転に係る株式移転計画書案（以下、「本株式移転計画書案」といいます。）から本株式移転比率に影響を及ぼす変更の行われていない本株式移転計画書が適法かつ有効に青森銀行及びみちのく銀行の株主総会で承認され、大和証券が検討した本株式移転に係る経営統合契約書案（以下、「本経営統合契約書案」といいます。）と実質的に同一内容を有する本経営統合契約書が青森銀行及びみちのく銀行との間で適切かつ有効に締結されること、本株式移転が本株式移転計画書及び本経営統合契約書に記載された条件に従って適法かつ有効に実行されること、並びに本株式移転計画書及び本経営統合契約書に記載された重要な条件又は合意事項の放棄、修正又は変更な



く、本株式移転が本株式移転計画書及び本経営統合契約書の条件に従って完了することを前提としています。また、大和証券は、本株式移転が適法かつ有効に実施されること、本株式移転の税務上の効果が両行から提示された想定と相違なく実現すること、本株式移転の実行に必要な全ての政府、規制当局その他の者の同意又は許認可が、本株式移転によりもたらされると期待される利益を何ら損なうことなく取得されることを前提としており、これらについて独自の調査を行う義務を負うものではありません。大和証券は、本株式移転の実行に関する青森銀行の意思決定、あるいは本株式移転と他の戦略的選択肢の比較評価を検討することを青森銀行から依頼されておらず、また検討しておりません。大和証券は、法律、会計及び税務のいずれの専門家でもなく、本株式移転に関するいかなる事項の適法性及び有効性並びに会計及び税務上の処理の妥当性について独自に分析及び検討を行っておらず、それらの義務を負うものでもありません。

大和証券は、本件に関するアドバイザー業務提供の対価として、既に受領済みの手数料に加え、青森銀行から本株式移転の成立を支払い条件とするものを含む手数料を受領する予定です。青森銀行は、大和証券の本件に関するアドバイザー業務に関連して生じ得る一定の責任について補償することに同意しています。大和証券は、本株式移転計画書案及び本経営統合契約書案の作成その他の本株式移転に関する交渉の一部に関与して助言を提供しておりますが本株式移転計画書案及び本経営統合契約書案の決定プロセスには関与していません。

大和証券の親会社である株式会社大和証券グループ本社を中心に構成されている大和証券グループは、主たる事業として有価証券関連業を中心とした投資・金融サービス業を行っており、過去、現在及び将来において、青森銀行及びみちのく銀行並びにそれらの関係会社に対して、有償で、有価証券関連サービスを含む投資・金融サービスを提供し又は今後提供することがあります。青森銀行は、本件以外の案件に関し、大和証券又はその関係会社が、現在又は将来、みちのく銀行及びそれらの関係会社に対して手数料を得て役務提供をし、又はする可能性があることについて了知し、当該役務提供を行うことについて予め異議なく承諾しています。また、大和証券及びその関係会社は、青森銀行及びみちのく銀行並びにそれらの関係会社の有価証券及び金融派生商品を含む金融商品を、自己又は顧客の勘定で取引又は保有することがあります。

本フェアネス・オピニオンは、大和証券が青森銀行からの依頼に基づいて青森銀行が本株式移転比率を検討するための参考情報を青森銀行の取締役会に提供すること（以下、「本フェアネス・オピニオン作成目的」といいます。）を唯一の目的として作成されたものです。従って、大和証券は、本フェアネス・オピニオンが本フェアネス・オピニオン作成目的以外の目的で使用されることに起因又は関連して生じ得る一切の責任を負うものではありません。また、青森銀行は、大和証券の書面による事前の同意なく、本フェアネス・オピニオンを第三者に開示、伝達又は参照させること及び第三者のために使用すること（以下、総称して「本件開示」といいます。）はできません。なお、青森銀行が、大和証券の事前の同意を得て本件開示をする場合においても、唯一青森銀行が責任を負うもので、大和証券は責任を負うものではありません。また、大和証券は、青森銀行以外の第三者に対して本フェアネス・オピニオンの記載内容又は本株式移転に起因若しくは関連して、一切の責任を負うものではありません。さらに、本フェアネス・オピニオンに記載された大和証券の意見は、青森銀行の普通株主に対して本株式移転に関する議決権等の株主権の行使（反対株主の買取請求権の行使を含みます。）、青森銀行株式の譲渡又は譲受けその他の関連する事項について何らの推奨又は勧誘を行うものではありません。

大和証券は、本フェアネス・オピニオンにおいて、青森銀行の普通株主にとって本株式移転比率が

財務的見地から公正であるか否かについてのみ意見を述べるものであり、大和証券は、青森銀行の普通株主以外の第三者にとって公正であるか否か又はその他の事項についての意見を求められておらず、かつ、意見を述べておりません。大和証券は、本フェアネス・オピニオンにおいて、本株式移転比率の決定の基礎となる各前提事実若しくは仮定、又は青森銀行の本株式移転に関する意思決定について意見を述べるものではありません。また、大和証券は、本フェアネス・オピニオンにおいて、本フェアネス・オピニオンの日付以降に取引される青森銀行、みちのく銀行及び共同持株会社の普通株式及び優先株式の価格について、いかなる意見を述べるものでもありません。大和証券は、本株式移転比率に関して、本株式移転に関わるいかなる役員、取締役若しくは従業員又はこれらと同様の者が受け取る予定のいかなる報酬の額や性質が公正であるか否かについて、意見を述べるものではありません。本フェアネス・オピニオンに記載された大和証券の意見は、本フェアネス・オピニオンの日付現在における金融、経済、市場その他の状況を前提とし、当該日付現在までに大和証券が入手可能な情報に依拠していますが、入手し得る資料及び情報に制約があるため、本株式移転比率の検討に使用した資料及び情報の中には、当該日付と異なる時点の資料及び情報も含まれております。また、本フェアネス・オピニオンに記載された大和証券の意見は今後の状況の変化により影響を受ける可能性があります。大和証券はその意見を修正、変更、更新、補足又は再確認する義務を一切負いません。

## 別紙2：みずほ証券によるフェアネス・オピニオンに関する前提条件等

みずほ証券は、2021年11月11日に本株式移転比率が、みちのく銀行の普通株主にとって財務的見地から妥当である旨の意見書（以下、「本書」といいます。）を出状しておりますが、その出状にあたっては、以下の点を前提条件としております。

みずほ証券は、本書における意見表明にあたり、みずほ証券が検討した全ての公開情報及び各行からみずほ証券に提供され、又はみずほ証券が各行と協議した財務その他の情報で本書における分析の実質的な根拠となった情報（以下、「本件情報」といいます。）の全てが、正確かつ完全であることに依拠し、それを前提としております。みずほ証券は、本件情報の正確性若しくは完全性につき独自に検証は行っておらず、また、これらを独自に検証する義務を負いません。従って、本書で表明される結論は、本件情報について、かかる情報を重大な誤りとする事項があった場合、又は本書交付時点で開示されていない事実や状況若しくは本書交付時点以降に発生した事実や状況（本書交付時点において潜在的に存在した事実で、その後明らかになった事実を含む。）があった場合には、異なる可能性があります。なお、みずほ証券はみちのく銀行の経営陣が、各行からみずほ証券に提供され、又はみずほ証券がみちのく銀行と協議した財務その他の情報について、不完全若しくは誤解を招くようなものとするような事実を一切認識していないことを前提としています。

みずほ証券が提供を受けた財務予測その他の将来に関する情報（将来の収益及び費用に関する予想、費用節減の見通し並びに各行の事業計画を含みます。）については、各行及び各行の関係会社の将来の経営成績及び財務状況に関し現時点で得られる最善の予測及び判断に基づき、各行の経営陣によって合理的に準備、作成されたことを前提とし、かつ、みずほ証券は、かかる財務予測及び事業計画の実現可能性について独自に検証することなく、これらの財務予測及び事業計画に依拠し、本書で言及される分析若しくは予想又はそれらの基礎となる仮定に関して何らの見解も表明しておりません。なお、本株式移転による両行のシナジー効果については、みずほ証券は本書の交付時点において意見表明に重要な影響を及ぼす可能性を定量的に評価できる事項は認識しておらず、本書における検討ではこれを盛り込んでおりません。

本書作成にあたってみずほ証券が要求した情報のうち、各行から情報の提供又は開示を受けられず、又は提供若しくは開示を受けたもののそれが各行の株式価値に及ぼす影響が現時点においては不確定なもの、又はその他の方法によってもみずほ証券が評価の基礎として使用できなかったものについては、みずほ証券は、みちのく銀行の同意の下で、みずほ証券が合理的及び適切と考える仮定を用いています。みずほ証券のかかる仮定が重要な点において事実と異なることが明らかになった場合に、評価結果が異なる可能性があります。

本株式移転は、日本の法人税法上、両行につき課税されない取引であること、及び本株式移転に関するその他の課税関係が本株式移転比率に影響を及ぼさないことを前提としています。また、みずほ証券は、独自に検証を行うことなく、本株式移転が適時に完了すること、並びに両行又は本株式移転で期待される利益に何らの悪影響を及ぼすことなく、本株式移転の完了に必要なすべての重要な、政府、規制当局その他の同意及び承認（法令又は契約に基づくものであるか否かを問わない。）を得ることができること、また、かかる同意及び承認の内容が本株式移転比率に影響を及ぼさないこと、各行に対し規制当局その他により発令若しくは課された命令、措置その他の処分がある場合には、各行から開示を受けたものを除き、それが各行の今後の業績に与える影響が存在しないか、又は今後も発生しないことを前提としています。みずほ証券は、法律、規制又は税務関連の専門家

ではなく、かかる事項については、両行の外部専門家が行った評価に依拠しております。

また、みずほ証券は、各行又はその関係会社の資産・負債（デリバティブ取引、簿外資産・負債その他の偶発債務を含む。）又は引当につき独自に評価・査定を行っておらず、その会計上・税務上の評価額の妥当性ないし会計処理・税務処理の適正性について分析しておらず、いかなる評価、査定又は分析についても、独自に第三者から提供を受けたことはなく、第三者に要求しておりません。みずほ証券は、各行又はその関係会社の財産又は施設を検査する義務を負っておらず、倒産、破産等に関する法律に基づいて各行又はその関係会社の株主資本又は支払能力についての評価を行っておりません。

各行並びにその関係会社のいずれも、本株式移転比率に重大な影響を及ぼすような契約、合意その他一切の書面を過去に締結しておらず、かつこのような決定を行っていないこと、また、将来も締結若しくは決定を行わないこと、及び本株式移転の実行により、将来、各行又はその関係会社が当事者として拘束される重要な合意に違反することとならず、かつ、かかる重要な合意を解除する権利又はかかる合意に基づき不履行を宣言し若しくは救済手段を行使する権利を生じさせないことを前提としています。みずほ証券は、本件情報において開示を受けたものを除き、各行及びその関係会社の訴訟若しくは紛争その他に関する偶発債務又は環境、税務若しくは知的財産権等に関する簿外債務は存在しないこと、並びに各行の事業に関する現在の保険加入額が事業運営上十分であることを前提としています。

本書は、本書の日付現在存在し、評価できる財務、経済、市場その他の状況を前提としており、かつ、本書の日付現在みずほ証券が入手している情報に依拠しています。なお、本書の日付現在みずほ証券が入手している情報若しくはかかる情報に潜在的に含まれている事実についても、本書の日付現在においてかかる情報・事実が各行の株式価値に及ぼす影響が必ずしも明らかではないものについては、みずほ証券は検討の対象としていません。また、現在及び将来において、各行が現在想定している事業・財務等の見通しに著しく影響を与える可能性のある技術革新、その他の事象は存在しないことを前提としています。従って、本書の日付以降に本書における検討の前提とした事実に変更若しくは影響が発生した場合、又は前記のような潜在的な事実が判明したことによる株式価値への影響が明らかになった場合等において、みずほ証券の意見が影響を受ける可能性があります。みずほ証券は本書を変更、更新、補足又は再確認する責任を一切負いません。

みずほ証券は、本株式移転に関連しみちのく銀行のフィナンシャル・アドバイザーとして、そのサービスの対価である手数料（本株式移転の完了を条件とする成功報酬を含みます。）をみちのく銀行から受領する予定です。みずほ証券及びその関係会社には、過去に両行並びに両行の関係会社に対してフィナンシャル・アドバイス、資金調達等に関するサービスを提供し、その対価として手数料を受取っているものがあります。みちのく銀行は、本書の提出に関連するものを含め、みずほ証券の関与によりみずほ証券に生じる一定の債務について、みずほ証券に対し補償することに合意しています。さらに、通常の業務過程において、又は、本株式移転に関連して、みずほ証券及びみずほ証券を構成員とするみずほフィナンシャルグループ各行は、自己の勘定又は顧客の勘定で、両行のいずれか又はその関係会社の発行する一定の株式、債券その他の証券を含む各種の金融商品を引き受け、保有し又は売却することがあり、随時これらの金融商品のポジションを保有する可能性、並びに両行のいずれか若しくはその関係会社又はこれらの会社の発行する各種の金融商品に係るデリバティブ取引を行う可能性があります。また、みずほ証券及びみずほ証券を構成員とするみずほフィナンシャルグループ各行は、通常の業務過程において、又は、本株式移転に関連して両行のい

ずれか又はその関係会社と融資その他の取引関係を有し、かかる行為について対価を受領する可能性があります。

みちのく銀行の第三者算定機関であるみずほ証券は、両行からは独立した算定機関であり、両行の関連当事者には該当せず、本株式移転に関して両行との利益相反に係る重要な利害関係を有しておりません。なお、前記利益相反に関し、みずほ証券のグループ企業であるみずほ銀行は、両行の株主たる地位を有しておりますが、みずほ証券は金融商品取引法（昭和23年法律第25号。その後の改正を含みます。）第36条第2項及び金融商品取引業等に関する内閣府令第70条の4の適用法令に従い、みずほ証券とみずほ銀行間の情報隔壁措置等の適切な利益相反管理体制を構築し、かつ実施しており、みずほ銀行の株主の地位とは独立した立場で本株式移転比率の算定を行っております。

みずほ証券は、本株式移転を進め、又はこれを実行することの前提となるみちのく銀行の経営上の意思決定に関し意見を提出することは要請されておらず、みずほ証券の意見はいかなる面においてもかかる事項を対象としていません。本株式移転比率は、両行間の交渉を経て決定され、みちのく銀行の取締役会により承認されるものであり、みずほ証券の意見は、みちのく銀行が本株式移転を検討するに際して考慮された多くの要因の一つにすぎません。したがって、みちのく銀行の取締役会の本株式移転又は本株式移転比率についての見解を決定付ける要因と捉えることはできません。また、みずほ証券は、本株式移転以外の取引又は本株式移転と他の取引との優劣に関し意見を提出することを依頼されておらず、本書においてかかる意見を表明しておりません。みずほ証券は、みちのく銀行又はみちのく銀行取締役会に対し、本株式移転に関連して第三者による関心を募るよう勧誘する義務を負っておらず、かつかかる勧誘を行っておりません。

みずほ証券の意見は、本株式移転比率が本書の日付現在のみちのく銀行の普通株主にとって財務的見地から妥当であるか否かに限定されており、みちのく銀行の他の種類の証券保有者、債権者その他の関係者にとっての本株式移転比率の妥当性について意見を表明するものではありません。また、みちのく銀行普通株主が本株式移転に関し、議決権行使その他の行為をいかに行うべきかについて意見を表明するものではありません。みずほ証券は、本株式移転の形態、ストラクチャー等を含む本株式移転の諸条件（本株式移転比率を除きます。）について意見を表明しておらず、また、両行のいずれかの取締役、執行役員若しくは従業員又はそれらに相当する者に対する、本株式移転に関連する報酬の額若しくはその性質、又はかかる報酬の妥当性に関する意見も表明しておりません。

# 経営統合に関する最終合意について

---



2021年11月12日

# 1. 経営統合の背景・目的

## 経営統合の背景

低金利環境の継続による  
預貸金利鞘の縮小・  
有価証券運用収益の減少

少子高齢化・労働人口減少等の  
経営環境の変化

COVID-19による  
社会構造変革への対応

デジタル技術の進展等による  
お客さまニーズの多様化

## 経営統合の基本理念

両行グループの強みを最大限に活かし、  
金融の枠組みに捉われず地域・お客さまの成長・発展に貢献できる、  
新しいグループを創る

## 経営統合の目的

金融システムの安定と金融サービスの提供の維持・向上により  
地域産業の更なる発展と地域住民の生活の向上に貢献し  
持続的な成長を果たしていく

- ✓ 両行グループのノウハウや情報・ネットワークの融合を通じた金融仲介機能・金融サービスの強化
- ✓ 地域の優位性等を活かした事業領域の拡大
- ✓ 経営の合理化・効率化を通じた健全な経営基盤の構築

## 2. 経営統合の概要

### 株式移転の方式

- 両行を株式移転完全子会社、新規に設立する共同持株会社を株式移転完全親会社とする共同株式移転となります。
- 経営統合の効力発生日の2年後を目処として、両行が合併を行うことを基本方針とします。

### 株式移転の比率

	青森銀行	みちのく銀行
普通株式	1	0.46
A種優先株式	-	0.46

### 経営統合の形態



### 経営統合に向けたスケジュール

2021年11月12日	経営統合契約書締結
2021年11月中(予定)	株式移転計画書の作成
2022年1月26日(予定)	両行臨時株主総会(株式移転計画の承認決議)
2022年4月1日(予定)	持株会社設立(効力発生日)、持株会社上場日
2024年度(予定)	傘下銀行の統合による新銀行設立

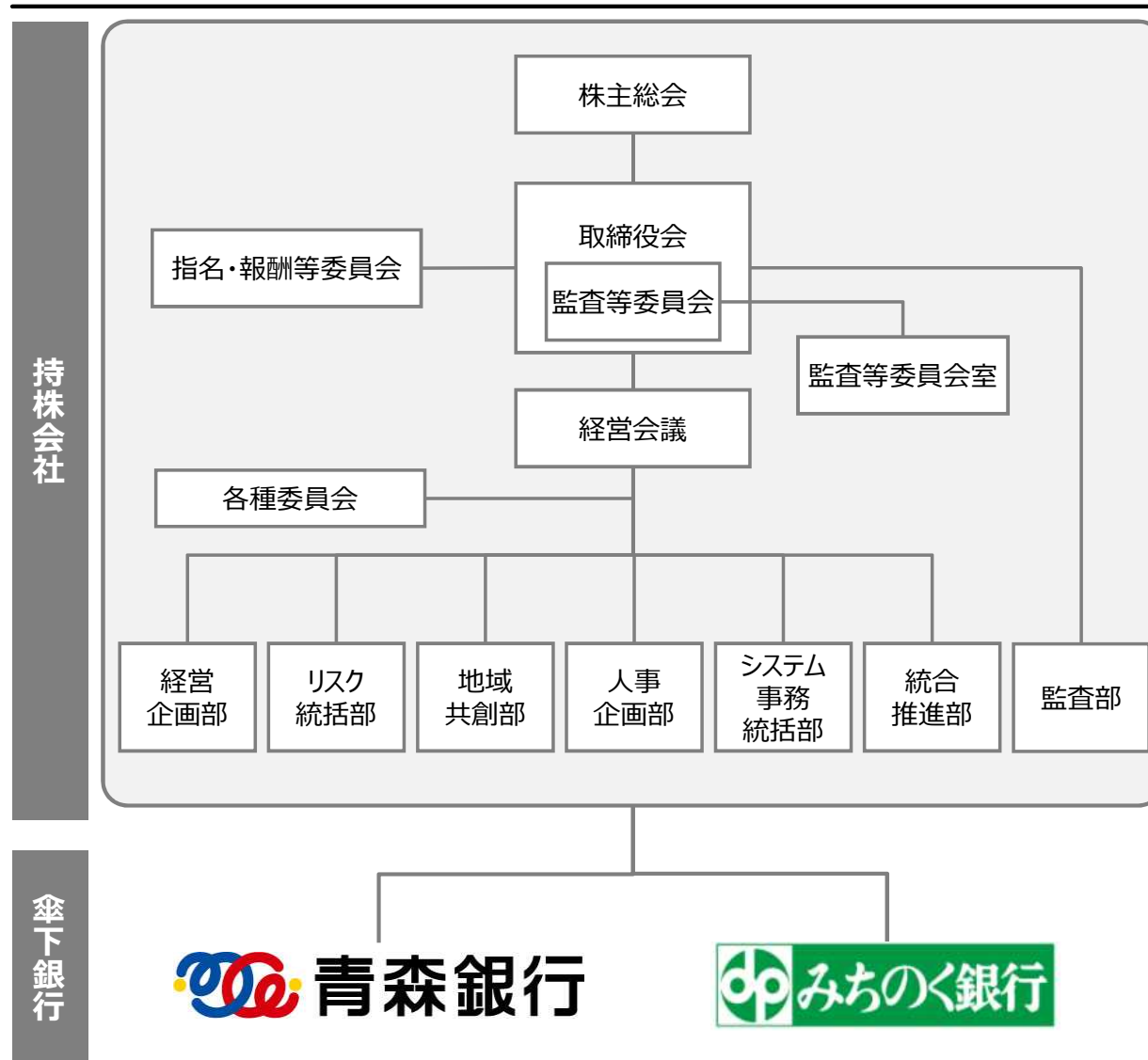


### 3. 経営統合後のグループ概要

#### 持株会社の概要

商号	株式会社プロクレアホールディングス (英文名：Procrea Holdings, Inc.)
本店所在地	青森県青森市勝田一丁目3番1号
主な本社機能	青森県青森市橋本一丁目9番30号
機関	監査等委員会設置会社
代表取締役	代表取締役社長：成田 晋 (青森銀行頭取) 代表取締役副社長：藤澤 貴之 (みちのく銀行頭取)
資本金	200億円
設立予定時期	2022年4月1日
上場証券取引所	東京証券取引所市場第一部 (2022年4月4日からは東京証券取引所プライム市場への変更を予定)

#### グループ組織図



## 4. 社名・経営理念

社名

株式会社 プロクレアホールディングス  
(英文) Procrea Holdings, Inc.

「挑戦と創造」

「プロクレア」は、ラテン語の「挑戦(Provocatio/プロウオカティオ)」と「創造(Creare/クレーアレ)」を合わせた造語です。地域の可能性に挑戦し、未来を創るという使命と、プロフェッショナルとしてお客さまとともに前進するという姿勢を込めています。

経営理念

「地域の未来を創る」

「お客さまと歩み続ける」

「一人ひとりの想いを実現する」

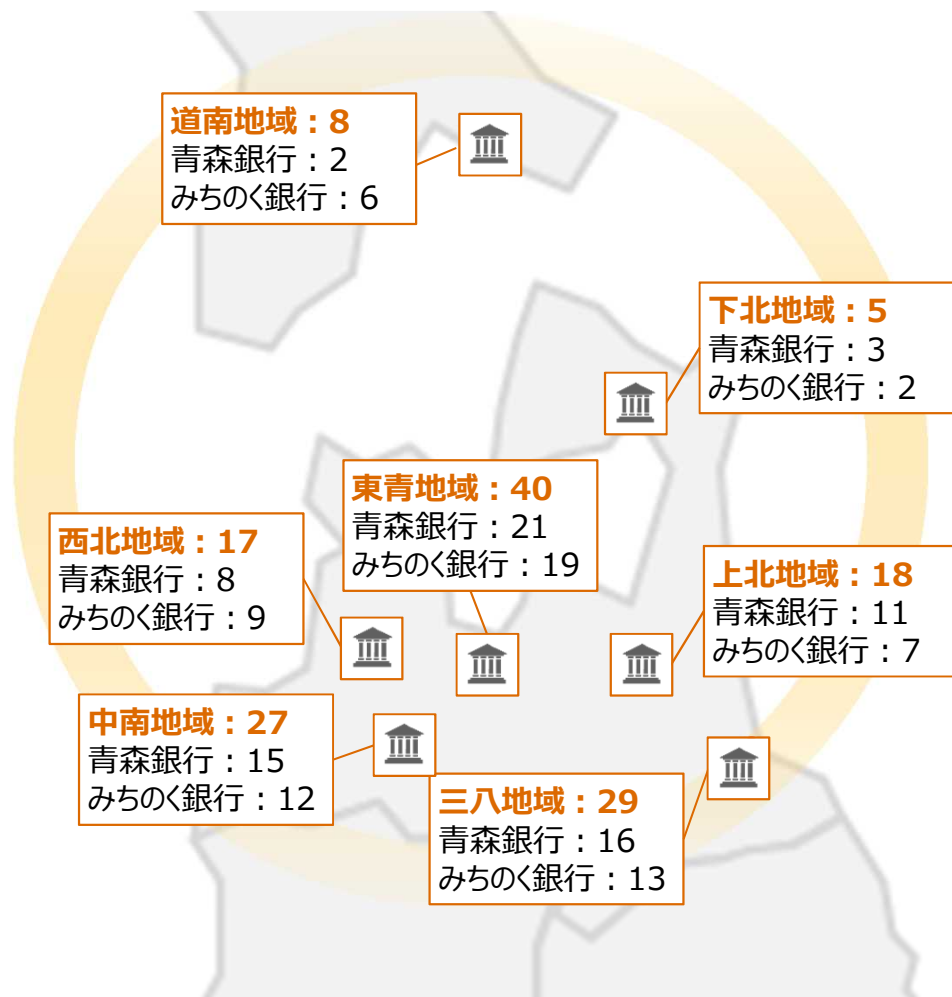
<理念に込めた想い>

- 私たちは、健全性を堅持するとともに、地域の課題や可能性に積極的に挑戦することで、明るく豊かな未来を創ります。
- 私たちは、専門性を高めるとともに、期待を超えるサービスを追求することで、お客さまの信頼に応え、成長と発展に向けてともに歩み続けます。
- 私たちは、自主性を尊重するとともに、多様な個性を力に変えることで、自信と誇りに満ちたやりがいのある組織を築き、一人ひとりの溢れる想いを実現します。

## 5. 新グループの営業基盤

### 主要拠点

青森県内から道南地域にかけて強い基盤を有する



### 拠点数

都道県	青森銀行	みちのく銀行	両行計
青森県	74	62	136
東青地域	21	19	40
中南地域	15	12	27
三八地域	16	13	29
西北地域	8	9	17
上北地域	11	7	18
下北地域	3	2	5
北海道	3	7	10
岩手県	1	2	3
宮城県	1	1	2
秋田県	2	2	4
東京都	1	1	2
<b>合計</b>	<b>82</b>	<b>75</b>	<b>157</b>

※拠点数は2021年9月30日時点

## 6. 新グループの基本戦略・シナジー効果

ノウハウ・ネットワークの融合をベースに、「経営の合理化・効率化」を通じ経営資源を創出することで、「金融仲介機能・金融サービスの強化」「事業領域の拡大」に取り組み、地域経済の発展に貢献します。

### A 金融仲介機能・金融サービスの強化

- お客さまのビジネス戦略・ライフステージに応じた伴走型の支援体制を構築し、地域を支える強い産業の育成に取り組む

### B 事業領域の拡大

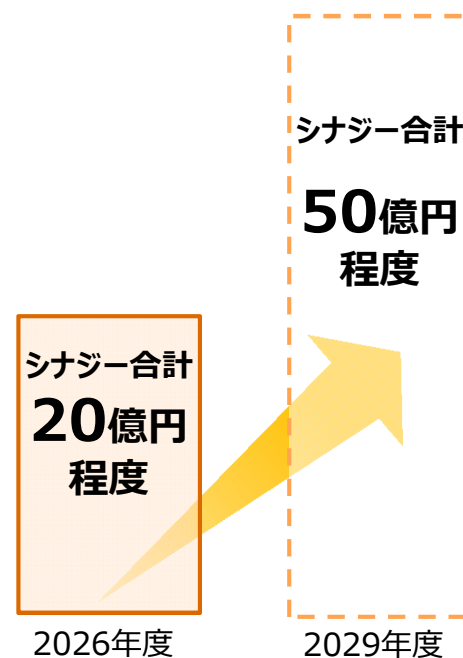
- ビジネスモデルを進化させ、地域の更なる発展と地域住民の生活の質の向上へ貢献

### C 経営の合理化・効率化

- 本部組織のスリム化
- 業務のデジタル化
- 店舗ネットワークの最適化
- システム共通化



### シナジー効果（目標値）



### 統合シナジーの発揮

両行の強み(ノウハウ・ネットワーク)の融合



ヒト

ノウハウ

情報

シナジー合計=  
+) トップラインシナジー  
+) コストシナジー  
-) 一時費用

## 7. A 金融仲介機能・金融サービスの強化

お客さまの「真」のニーズ・課題をともに考え解決する伴走型のコンサルティングを展開します。さらに、ライフステージに応じた高度かつ専門性の高いソリューションを提供し、支援の「広さ」と「深さ」の両立を目指します。加えて、サービスのデジタル化に積極的に取り組み、常にお客さまの身近にあるグループとして存在します。

### サービスの高度化

伴走型コンサルティング

多分野における  
専門性の高度化

商品・サービスの  
共同開発

ネットワークの融合・拡充による  
マッチング支援の高度化

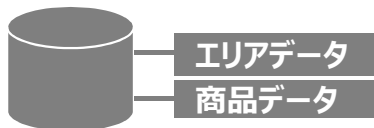
### デジタル化の推進

#### デジタルチャネルの活用

- ✓ 非対面チャネル・サービスによる接点拡充
- ✓ キャッシュレス対応

#### データの利活用

- ✓ 新グループ保有データのマーケティング活用



### 伴走型コンサルティング支援

#### 個人のお客さま

就職 結婚 子育て 教育 相続



デジタル化推進による利便性の向上

#### 法人のお客さま

創業・成長期

安定期・低迷期

再生期

創業成長支援

事業承継支援

経営改善支援

#### お客さまへの貢献

< 接点 > お客さまが求める方法・頻度で

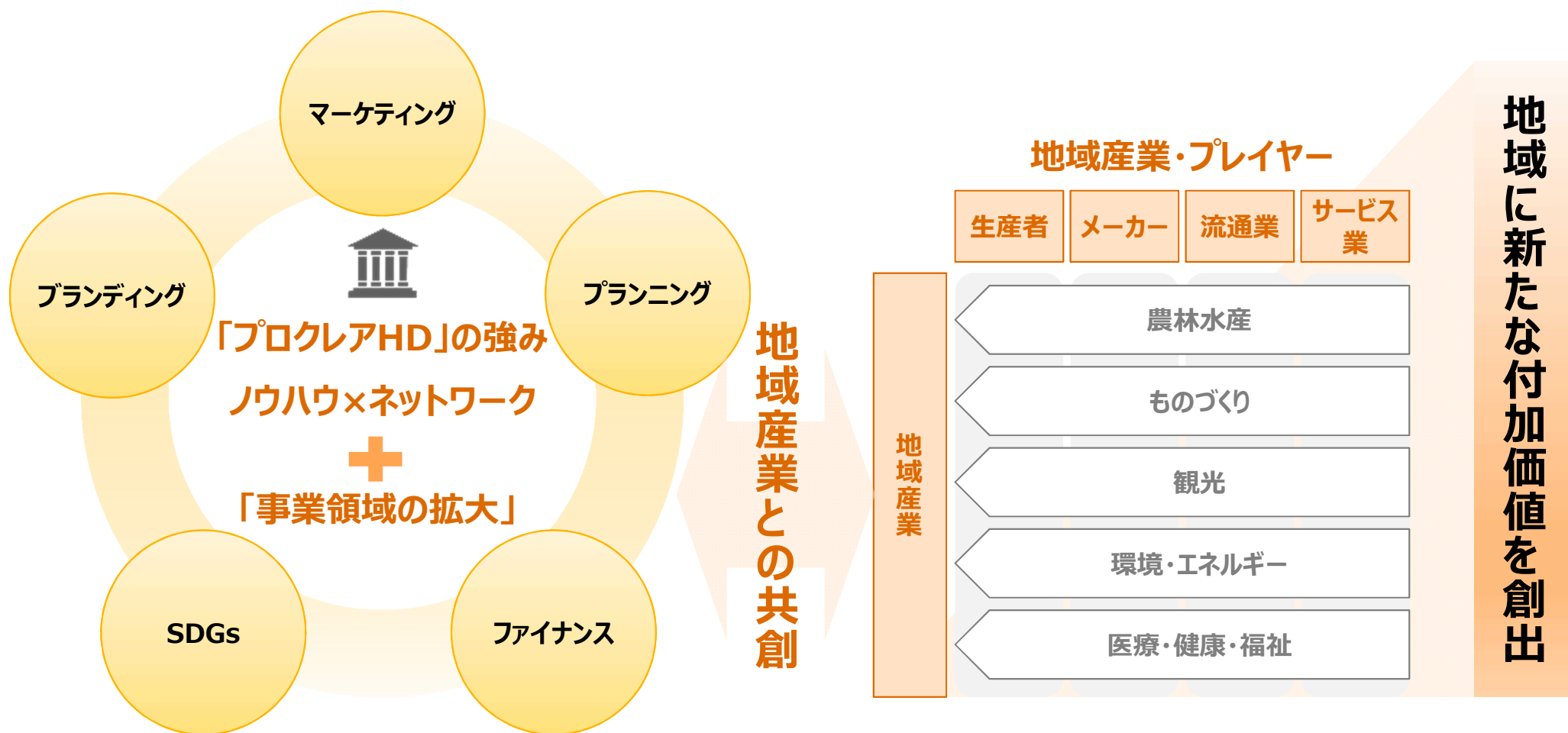
< 理解・対話 > これまで以上に広く・深く

< 課題解決 > 最適なコンサルティングを展開

## 8. B 事業領域の拡大

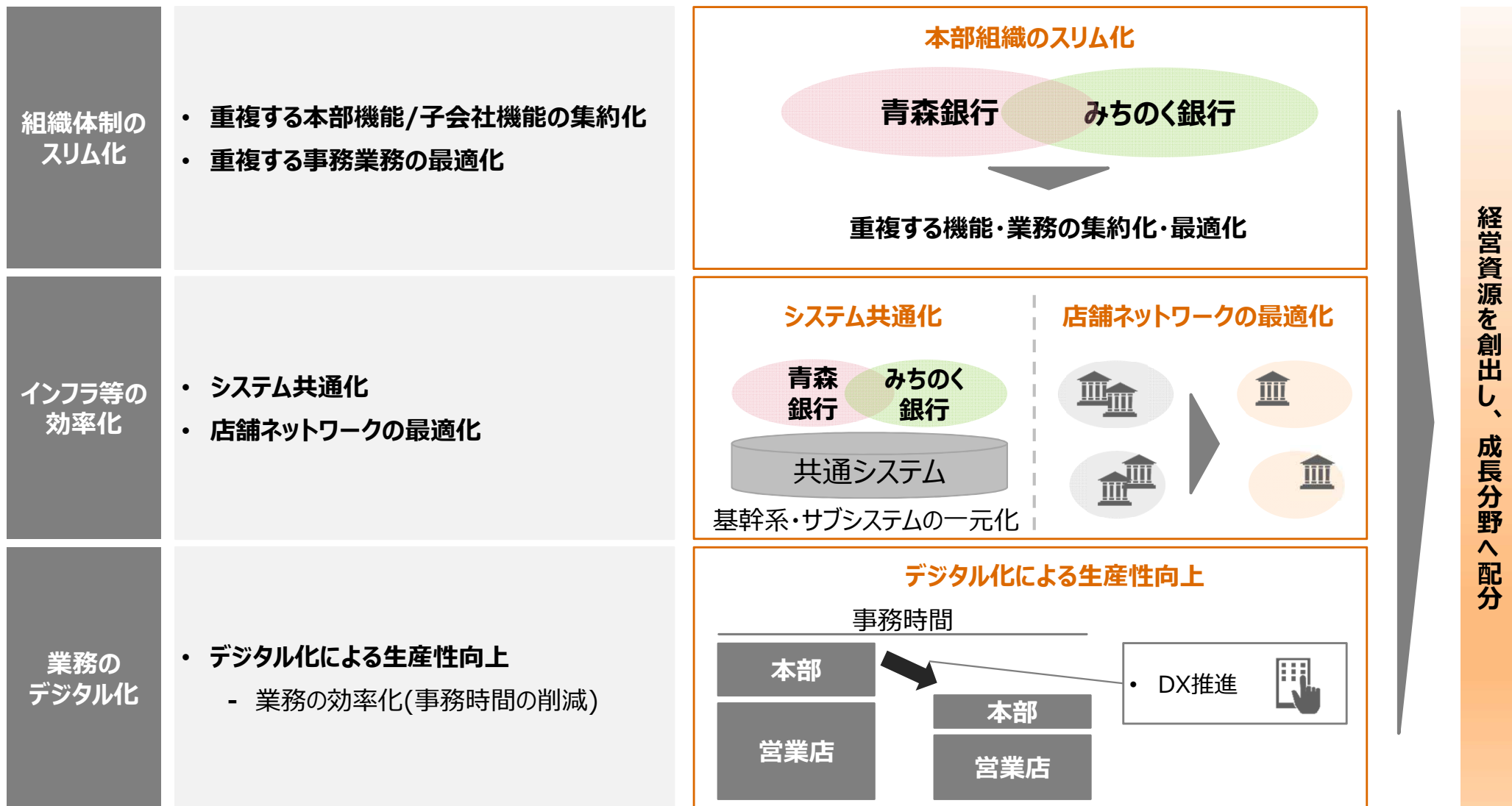
新グループのノウハウ・ネットワーク等の活用に加え、事業領域の拡大を通じて地域の可能性に挑戦する産業・プレイヤーとともに新たな付加価値の創出に取り組みます。

地域のポテンシャルを活かした産業・プレイヤーとの共創



# 9. ③ 経営の合理化・効率化

経営統合により合理化・効率化を進めることで、健全な経営基盤を構築し、創出した経営資源を成長分野へ配分します。



# 10. 地域の持続的成長への貢献

地域が抱える課題に対し、新グループとして地域と一体となって地域創生・活性化に貢献します。

## 信頼・安心感のあるサービスの提供

- 安心安全で普遍的なサービスを提供し続ける
- お客さまの多様化するニーズに対応したサービスを提供する



## 金融の枠組みを超えたイノベーション

- 金融の枠組みに捉われず、地域・お客さまのイノベーションとともに「挑戦」する



## 地域の魅力向上に取り組み、地域とともに成長

- 地域の可能性を引き出すことで魅力向上に貢献し、地域とともに永続的に成長する





本件に関するお問い合わせ

株式会社青森銀行 総合企画部 広報室 : TEL 017-777-1111

株式会社みちのく銀行 経営企画部 広報室 : TEL 017-774-1274